

情報革命がもたらす図書館の変容

薬師院 はるみ

Transformation of the Library in the Digital Environment

Harumi YAKUSHIIN

I. 序 章

今日、通信や情報処理に代表される新しいテクノロジーが次々と開発されていることは周知の通りであろう。新しいテクノロジーは各方面において相次いで採用され、あらゆる領域に様々な影響を与えている。中でも、知識や情報に関わる分野、とりわけ伝統的に印刷媒体に依存してきた分野では、新しいメディアの登場によって大きな試練に立たされる傾向にあり、この問題に関して数々の意見が提出されている。

例えば、2000年5月から9月にかけて、オンライン版『本とコンピュータ』誌上にて、「人はなぜ、本を読まなくなったのか？」という国際討論が行われた。同討論において、論者たちは、いわゆる「読書離れ」という現象が世界中で見られるものなのか、という基礎的な情報の次元に属する質問に答えるのみならず、この現象が生じていることの意味についても考察することが要求された。すなわち、この現象は、「インターネットに代表される新しい電子メディアの登場によってこれまでの『読書習慣』が壊滅的に失われていくことの、いわば文明史的な大転換の予兆なのだろうか」という問いが立てられたのである。

伝統的に、印刷資料を通じて知識や情報に関わってきた図書館でも、今日の情報革命に無関心ではいられない。事実、図書館界はここ数年、この問題に対して他の領域に勝るとも劣らない極めて大きな関心を寄せている。この問題は、図書館関係の研究集会において頻繁に討議すべき課題の一つとして取りあげられ、図書館関係の雑誌において、何度も特集という形で論じられているのである。すなわち、高山が述べるように、電子（化された）図書館に関する「テーマは'95～'96年ぐらいから日本では大流行のテーマ」だといえるであろう。

しかしながら、図書館界での論調は、例えば先に示した国際討論などとはかなり趣を異にしている。図書館界において、「読書という行為が将来的にどうなっていくのか」といった一種哲学的な問いが正面から論じられることは稀であり、むしろ議論の中心は、図書館の運営やサービス提供、あるいは図書館員の立場や地位に関するどこか経営戦略的な問題に置かれる傾向にある。そのためか、新しいテクノロジーについても、大抵の場合、〈図書館本来の〉理念や目的を達成させ、サービスを向上させ、業務を効率化させるための存在、すなわち、行為主体の意図に対して受動的でしかない道具的存在として認識されているようなのである。

例えば、『図書館界』（2000年1月）の特集「テクノロジーと図書館」にも、その認識が体现されているのを認めることができる。そこでは、『「図書館は何をすることか」の視点に立っ

て、そのテクノロジーがもたらす影響と変化について、『これまでの図書館の何を変え、何を変えてはならないか』を論じ、その問題点を明らかにし¹⁾しようとの問い掛けがなされている。そして、同特集の諸論文でも、やはり、新しいテクノロジーは単なる手段であることが随所で強調され、あくまでも図書館サービスを豊かにするために用いるべきことが何度も主張されているのである。しかし、実際の出来事に注目した場合、それらが図書館にもたらしたものは、単なる道具的な利便さだけであったといえるだろうか。

なるほど、ほとんど全ての図書館が、新しいテクノロジーを〈道具〉として採用したことは確かなのであろう。実際、日本の図書館でコンピューターが使われ始めたのは1970年代の半ば頃からだといわれるが、それらは多くの場合、大量の貸出・返却業務を迅速に処理する目的で取り入れられたのだという²⁾。また、『日本の図書館』(1999年)によれば、すでに公立図書館の80%以上、大学図書館の90%以上が、何らかの形でコンピューターを取り入れている計算になるが、それらにしても、元々は何らかの業務その他に役立てるために導入されたのであろう³⁾。

けれども、図書館業務にコンピューターが導入されたことは、大抵の場合、その業務を単に省力化ないしは効率化する以上のものをもたらした。例えば、貸出・返却作業や予約処理の迅速化を図る目的で導入されたコンピューターは、当初の目的に加え、「貸出し期限を過ぎたばかりの催促状の自動的作成をも可能にし、貸出し数、貸出した文献のテーマの状況、利用者の社会的構成などをこと細かく表示した図書館統計を出し、今後の蔵書充実について逆推理を可能にし⁴⁾した。また、通信回線は、同一自治体内に存在する各公立図書館の一元化を可能にした。具体的には、同一自治体内であればどこで借りても返してもよいということになったのである。あるいは、複数館の目録情報が通信回路で接続されたことにしても、各館で目録作業に費やされる労力を大幅に減少させるなど、業務面のみに役立っただけではない。総合目録データベースがOPACとして開放されたことで、利用者は、どこからでも自らの手により資料に関する各種情報を複数館から瞬時に入手できるようになった。さらに、目録データベースは、カード目録や冊子目録では行うことができない論理演算による多面的検索を可能にした。このように、コンピューターが導入され、それらが通信回路に接続されたことは、図書館における運営面のみならず、利用者の世界をも大きく変化させた。

それだけではない。テクノロジーの発達に伴い、図書館では多様な記録媒体による資料を取り扱うようになった。実際、現在では、レコードやビデオテープを始め、CDやDVD、さらにはネットワーク上の情報までもが図書館資料として見なされる傾向にある。確かに、山本が指摘するように、「図書館が扱いうる媒体の種類は急速に増加してきたが、実際に図書館が扱っている資料の種類は、実はそれほど増えているわけではない⁵⁾」のかもしれない。それでも、千賀は、「図書館がネットワーク系出版による情報なり文献を……無視することは、図書館の近未来の役割の大切な部分の放棄にもつながる⁶⁾」とまで述べ、しかもこれは、決して一個人による特殊な見解によるものだというわけでもない。少なくとも、ニューメディアの登場により、図書館は必ずしも「図書に関わる館」だとは言えなくなってきた。すなわち、新しいテクノロジーは、図書館資料の種類までも変化させたことになる。

このように、新しいテクノロジーは、図書館に関わるあらゆるものを何らかの形で変化させてきた。貸出業務の重要性や無料の原則といった事柄でさえその例外ではない。たとえ多くの図書館員が、「貸出という基本的な仕事を図書館員が放棄するのは論外」¹⁰だと声高に反撃しようとも、1990年代には「個々の利用者がセルフサービスで貸出や返却の処理を行う機器があらわれた」¹¹ことも事実なのである。また、長谷川のように「現に流通しているネット上の有料コンテンツに関しては現在の図書館無料の原則はなくなる」¹²との予想をする者さえ少なからず存在する。すなわち、新しいテクノロジーは、「図書館の最も基本的機能である貸出し」¹³のあり方まで変えてしまう可能性を持っており、図書館で最も重用視されてきた無料の原則までも脅かしつつあることになる。

今からおよそ20年前、ランカスターは「……2000年までに、私たちが現在知っているような図書館の消滅を予期するのは、きわめて当然のことと思う」¹⁴と述べた。この予言は、一見外れているかのように思われるであろう。というのも、2000年を迎えた現在、20年前に私たちが知っていたような図書館は消滅せず、また、当分の間消滅しそうにもないからである。実際、バックランドも、「図書館未来論の多くは、本の形態がまったくなくなってしまうとか、図書館が消滅するなどというありそうもない表現を用いて議論している」¹⁵と述べ、「図書館の世界ではその根本的な基盤再構築が現在進行中である」¹⁶ものの、だからといって、「図書館サービスの使命が変わったというのではな」¹⁷いことを強調している。すなわち、「図書館業務のコンピュータ化と特に電子形態の図書館資料の出現は、」あくまでも「図書館サービスの提供手段における急激な変化」¹⁸にすぎないというのである。それでも、情報技術の高度化に伴い、従来図書館が担ってきたような役割を、図書館ではないものが果たすという現象も実際に見られるようになってきた。例えば、長尾は、WAIS、gopher、mosaic等、インターネット上の情報検索に利用できるソフトウェアについて紹介し、その上で次のように記している。

このようなことは、これまで図書館司書が所蔵目録や出版目録、また図書分類法などを頼りにして読者に行っていた参考業務と呼ばれる図書に関する相談とほとんど同じである。mosaicの場合は強力な情報検索機能を駆使することができるので、むしろそれ以上の内容のものであるともいえる。そして、図書館へゆかなくても、これらのことが自分の机の上のコンピュータを操作するだけで十分に達成できるのである¹⁹。

あるいは戸田も、「もし、電子図書館が専門図書館の役割も果たすことができるようになれば、専門図書館は消滅するであろう」²⁰と述べている。要するに、今日の情報革命に伴い、図書館そのものが消滅することはないにしても、図書館の何か根底的な部分が、その変容を余儀なくされているようなのである。

バーゾールは、情報社会やオンライン社会などと言われる今日の「時代を映し出す最も適切な表現」として、詩人オーデンによる「不安の時代」という言葉を呈示した。社会的政治的経済的情勢が急速に変貌を遂げつつある現状を目の当たりにし、大勢の人々、特に図書館員は不安を抱いているというのである²¹。ということは、その「不安」が、電子（化された）図書館

に関する問題を、図書館界における「大流行のテーマ」にしている要因なのだろうか。今までにないほど図書館が変貌していくことに対する危惧や焦燥が、「何を変えてはならないか」という問題に関する議論を反復させているのだろうか。仮にそうだとすると、いったい何が変わることが心配されているというのだろうか。

以下では、今日のデジタル情報革命が図書にもたらしつつある変容、特に、必ずしも行為主体の意図に従属しない変容と、それらの変容が生じる仕組みについて考察する。これは、今日の図書館界において、新しい情報技術に関する議論を盛んにしている要因についての模索であるともいえる。新しいテクノロジーの導入に伴う変化は、しばしば業務上の方法やサービス提供の手段における変化として位置づけられようとするのであるが、その位置づけの背後に潜む本質的な要素を模索することが本論の課題なのである。

II. テクノロジーの開発と図書館の変容

多くの図書館では、必ずしも、旧来のあり方や理念をかたくなに固持しようとしているわけではない。また、新しい情報技術を利用することが、図書館の姿に何らかの作用を及ぼしうる可能性について全く気付いていないというわけでもない。例えば、『2000年度日本図書館情報学会研究大会シンポジウム』の『企画意図』にも、次のように記されている。

……今まさに21世紀を目前にむかえて、図書館技術が大きな変容を迫られている。それは、……「情報技術 (IT)」の発展、およびそれに伴う「電子図書館技術」の研究の進展による影響にほかならない。この急速な技術革新は、技術主導型とも呼ぶべき変化を図書館界にもたらしており、技術の進歩を理念が後から追いかけているような印象さえ受ける²²。

すなわち、あまりにも急激に技術開発が進みつつある今日では、確固たる理念的背景の下で図書館技術を発展・変化させているというより、逆に、技術的背景が図書館の理念を規定していくかのような現象さえ認められるというわけである。要するに、今日では、図書館のあるべき姿なるものが、テクノロジーという外的要因によって変化していく可能性についても否定されてはいないということになる。そればかりか、情報革命の進行は、図書館の役割を変化させ、図書館員に対するイメージや理想像にまで影響を及ぼすものとして捉えられることすらある。

例えば、ハリスらによれば、アメリカの図書館界において、物質生産よりも情報や知識が重視される情報化社会、すなわち、ダニエル・ベルが言うところの脱工業社会の到来は、図書館員が専門職としての地位を獲得する絶好の機会として見なされることも多いという。そして、あたかもベルの理論を図書館学に応用したかのようなランカスターの議論は、その代表として位置づけることができるというのである²³。

たしかに、ランカスターは、「エレクトロニクス時代の図書館員は化学者、物理学者、医者、弁護士、教育者などの専門職の同僚として尊敬される職業になる」²⁴との見解を示している。つまり、「情報の収集、処理、分配がわれわれの生活にどうしても欠かせない要素となってきたため、経験ある情報の提供者として、図書館員はその社会的価値と評価を高める機会にめぐ

り逢うことになるだろう」²⁵というわけである。

ただし、ここで予測されているのは、図書館員が社会的に重要視されるようになる可能性についてであり、図書館に対する評価が上がることではない。むしろ、物理的施設としての図書館に対しては、将来的に社会的な価値を低下させていくとの判断が下されているのである。そのため、ランカスターは、図書館員に対し、図書館という施設から独立して情報やサービスを利用者に直接提供する情報専門職として活動することを強く勧めている。そうすることで、図書館員は、自らに対するイメージや地位、そして報酬を大幅に上昇させることが可能だというのである。

なるほど、ランカスターが提唱するような方法を採用すれば、図書館員は専門職としての地位を獲得することができるのかもしれない。けれども、その際、「図書館員」はもはや従来の図書館員ではない。すなわち、それは情報（に関する）専門職であって、図書館（の職）員ではない。また、その専門職の役割は、従来の図書館員が持っていた役割と同じだというわけでもない。というのも、従来の図書館では、情報の処理や提供に関するサービスのみを提供してきたわけではないからである。

ところで、バーゾールは、ランカスターを始め、「21世紀に到達できる新しいライブラリアンシップのビジョン」²⁶として電子図書館という概念を採用した人々を、「電子図書館の神話創造者」と総称している。その神話創造者達が、将来における図書館の「抽象化、図書館の全面的な建物離れ、あるいは脱物質化、さらに建物としての図書館の完全な消滅といった方向」²⁷を予測しているのとは対照的に、バーゾールは、今後も「物理的场所としての図書館は社会と図書館員にとって意味を持ち続けうる」²⁸との見解を示している。のみならず、「図書館員の役割は、図書館という施設と切り離して考えることはできない」²⁹と主張する。そのため、「もし場所としての図書館の実体とイメージを捨てれば、ライブラリアンシップはその力の多くを失う」³⁰こととなり、むしろ、「機関の枠組みのなかでこそ、ライブラリアンシップは専門職としてのより確実な地位を勝ちえるであろう」³¹というのである。

バーゾール自身も、「通常の社会科学の文献は、専門職制と官僚制との間には本質的に矛盾があることを指摘しており、これは専門職としての地位向上を願う図書館員の間で支持された考え方である」³²ことは十分に承知している。その上で、「電子図書館の神話創造者」が、図書館員の目指すべき専門職の模範像として、官僚制的な束縛を逃れて独立自営することが可能な専門職、すなわち、医者に代表される伝統的な専門職のあり方を採用していることに對し、それがすでに時代遅れな思考であると批判するのである。というのは、今日では、「むしろ医者も、官僚制的機構に属する膨大な数の専門職の列に加わりつつあ」³³り、従って、「図書館員は、専門職の典型として、医者に代表されるような独立した実務専門家を理想とするのをやめる時である」³⁴と考えるからである。このような観点から、バーゾールは、「教師、メンタルヘルスの専門家、ソーシャルワーカー、看護婦、図書館員のような人々」³⁵を、新たな範疇として、「人間志向的サービス専門職」と命名している。

なるほど、バーゾールの主張に従えば、物理的场所としての図書館に対する社会的価値を低下させることなく、また、「市場経済における情報ブローカーという仕事の範囲内に図書館員

の役割を限定する」³⁶ こともなく、図書館員が専門職化する方法を見出すことができるように思われるかもしれない。しかし、「人間志向的サービス専門職」なる範疇は、結局のところ、「通常の社会科学の文献」が準専門職と呼び習わしてきたものの名前を変えただけである。準専門職は、「専門職制と官僚制との間には本質的に矛盾がある」がゆえに「準」専門職と規定されていた。つまり、「準」であれ「人間志向的サービス」であれ、そのような限定詞そのものが、すでに古典的な専門職像との類比に依存しているのである。従って、もし「人間志向的サービス専門職」なるものが、「準」専門職ではなく「純」専門職としての地位を獲得しようとするのであれば、バーゾールの主張するように、古典的な専門職を模範像とすることを止めなければならないことになる。たしかに、そのこと自体は正しい。だが、そうになってしまえば、「教師、メンタルヘルスの専門家、ソーシャルワーカー、看護婦、図書館員のような人々」を、敢えて専門職と呼ぶ理由もまた、同時に失われてしまうことになるのである。

要するに、情報革命が進行しつつあると言われる今日では、図書館員が専門職としての地位を獲得し、より有益な立場として存続し続ける道を追求しようとするれば、「図書館員」の役割を変容させるか、そうでなければ、「専門職」の概念を変えるかという、いずれにしても非常に困難な選択を迫られるという論理的帰結に到達せざるを得なくなる。

従って、この問題を、現代の図書館界に存在する「不安」の源泉として理解することも可能であろう。情報技術が急激に発達していく中で、図書館でも、時代に取り残されないよう新しい技術を次々と取り入れていくべきだと言われている。また、その技術的变化に合わせ、図書館の使命も、時代に応じたものへ変えていかなければならないと主張されることもある。一方で、その変化は、従来の図書館が持っていた価値や果たしてきた役割を放棄ないしは減少させるようなものであってはならず、むしろ生かすようなものでなければならぬと考えられている。端的に言えば、既存の図書館と外部の変化との間に、何とかして折り合いをつけていかなければならないというわけである。

確かにそうなのである。そうではあるが、図書館界における不安や危機感、換言すれば、新しい情報技術に関する議論を反復させている要因を、それだけで説明することはできない。というのも、新しい技術の導入が、既存の図書館に何らかの変化をもたらすにしても、あるいは、図書館が、その変化に何らかの適応をしなければならぬにしても、そのこと自体は、旧来図書館が掲げてきた理念やあり方までもを變更ないしは否定してしまう根拠にはなり得ないはずだからである。それにも関わらず、人々が不安なり抵抗感を覚えるのは、技術的变化に伴い、これまで掲げてきた理念や重要視されてきた役割までもを變更していかなざるを得ないかのような状況が認められること、つまり、上で言うところの「技術の進歩を理念が後から追いかけているような印象」を受けることに起因すると言えるのではないだろうか。すなわち、そこには、図書館ないしは図書館員の利害や損得勘定などのみには決して還元することができない何か本質的な問題が存在していると考えられるのである。しかしながら、なぜ、このような事態が生じているのだろうか。次節ではその問題に照準する。

Ⅲ. テクノロジーの浸透と感覚の変容

合庭は、かつてCD-ROMが登場してきた際には、「コンピュータで可能なのは情報の検索であって、われわれが日常経験しているような読書はできないと主張する多くの人々がいた」³⁷たことを指摘している。そのため、当時の電子メディアに関する「典型的な議論は、コンピュータのディスプレイで読書ができるか、というものであった」³⁸とのことである。ところが、「こういった議論をともないながら、現実には電子メディアがわれわれの情報環境のなかに着々と浸透し」³⁹ていき、現在では、電子出版という「存在を前提として出版というものを論じなければならない段階に来ている」⁴⁰のだという。つまり、「紙なのかディスプレイなのかという議論はもはや意味をもたない」⁴¹くなり、議論すべき問題は、「情報がパッケージで届けられるのか、それとも、ネットワーク経由でダウンロードされるのかという設定に変わってしま」⁴²ったというのである。

電子媒体を用いた読書行為が受け入れられていったのは、ディスプレイ技術が向上し、また、検索機能の高さや文書の保管場所が小さくてすむことなどその優位性が認識されるようになったからだとも考えることもできよう。けれども、それと同時に、人々の電子媒体に対する抵抗感が減少していったということも確かなのではないだろうか。というのも、たとえどんなに「ディスプレイを紙に限りなく近づけるための技術開発」⁴³が進んだところで、ディスプレイを読書にはそぐわないものとして見なす感覚が強固である限り、「紙なのかディスプレイなのかという議論」が意味をもたなくなるなどありえないからである。

しかしながら、なぜ、ディスプレイに対する違和感は解消されていったのだろうか。その答えを探るにあたっては、例えば、「メディアはメッセージである」との命題で有名な、マクルーハン理論が参考になる。周知のとおり、マクルーハンは、メディアそのものは中立だとの通念を否定し、内容ではなくメディア自体に注目すべきだと主張している。そして、「すべてのメディアにたいする従来の反応は、すなわち重要なのは使い方だという反応であるが、それは麻痺を起こした技術馬鹿の陶醉状態である」⁴⁴とまで述べているのである。

マクルーハンに特徴的なのは、「すべてのメディアが人間の感覚の拡張」⁴⁵と捉える点である。つまり、「音声、文字、ラジオ等々、いずれの手段を用いて語ろうが、いずれにせよ自分たちの感覚器官のどれかひとつを拡張しているわけであって、その結果、拡張されなかったその他すべての器官とその機能を攪乱しつづけてきた」⁴⁶という。メディアにより感覚が外化されると、今度は逆に人間の感覚に反作用し、新しい感覚及び社会関係が創造される。つまり、「五感のひとつが技術によって人間の外部に延長されるとき、その新技術が人間の精神の内部に内化されるのと同じ速度で、文化の新しい翻訳が発生する」⁴⁷というのである。

仮にそうであるなら、印刷物に専有されていた領域に新しいメディアが次々と侵入し、遂には紙媒体に取って替わろうとするかのような現在の形勢が、それと同時に、言葉や読書に対する感覚、ひいては思考様式をも変容させていく可能性も否定できないということになる。実際、マクルーハンも、「われわれが今日心して学ぶべきことは、電気技術がわれわれのもっとも日常的な知覚認識や行動習慣に根底から影響をおよぼす、ということである」⁴⁸と述べ、『メディア論』⁴⁹では、新しい電気メディアが、それまでの活字文化を成立させていた人間の感覚

様式を変容させ、社会関係を再編成させる問題について論じている。

また、バーカーツが、「エレクトロニクス文化へと向かう状況において、読書と感受性がどんな立場を占めるのか」³⁰という問題意識を抱いたときに見据えていたのも、まさにこの点であった。バーカーツもやはり、新しいテクノロジーを、従来の世界に便益をもたらすだけの、いわば単なる道具的な存在として見なすことを否定する。そうではなく、それらが、書物や読者の世界を根本的に変化させ、信仰、価値、文化的目標、さらには慣れ親しんだ風俗習慣や倫理的な評価基準までも変えてしまうということに着目しているのである。

確かに、バーカーツ自身が述べるように、「書物のページを画面のスクリーンに置き換えることは、まだ全面的ではないし……決して全面的にはならないかもしれない」³¹。それでも、バーカーツは、今や「社会が至福千年風の大きな変容を迎えている」³²のだと主張し、その変容に伴う「すべての社会的前提の全体にわたる書き直しが、《読むこと》と《書くこと》にすこぶる影響を及ぼすことは間違いない」³³というのである。

バーカーツは、次のように述べている。

何を書き手が書くか、どのように書き、編集され、印刷され、そして売られるか、それから読まれるか——古い前提はすべて包囲され、攻撃を受けている。しかも、これらはほんの外面的な現われにしかすぎない。さらにより深い交替が主観的な領域で起こっている。印刷された本、その本の書き方と読み方が変更され、エレクトロニクスによるコミュニケーションが支配を主張するにつれ、文学の実際の《感じ》が変化を受ける。読むことと書くことは、前とは異なったことを《意味する》ようになる。それぞれ新たな意味を獲得することになる³⁴。

この変化について論じるため、バーカーツは、この議論が展開されている書物の副題でもある「エレクトロニクス時代における読書の運命」に関して、自ら体験した事柄を中心に数々の注目すべき現象を指摘し、それらの指摘に基づく独特な思考を展開している。

なるほど、今日に特徴的な読書行為や、情報の捉え方、ひいてはものの見方や考え方の由来を、悉く新しいテクノロジーに関連づけて説明しようとするバーカーツの理論は、ややもすれば強引なものとして受け取られる傾向にあるかもしれない。また、バーカーツ自身が認めているように、同書では「論議は線形風に処理されているのではなく、むしろ……有機的な寄せ集めと思うものによって処理されて」³⁵おり、特に前半部分は「くだけた、ごく主観的な読書生態^{エコロジー}、読者としての私個人の経験から推定される生態」³⁶が大半を占めている。すなわち、そういう意味においては、「読書の運命」が第三者的な立場から体系的に論述されているわけでもなく、また、新しいテクノロジーにより、言語に対する社会全体の関係が変化する所以が筋道立てて論証されているというわけでもない。

加えて、バーカーツは、コンピューターに代表される今日のハイテク文化を、どちらかといえば悲観的に捉え過ぎている観もある。実際、マンガエルもその点に関して、「経験や歴史といったものを単なるノスタルジアに委ねてしまっていると言わざるをえない」³⁷と述べ、手厳

しく批判している。それでも、バーカーツによる諸指摘とは逆の流れを体験している人などごく少数派にすぎないであろう。それどころか、その諸記述のほとんどには、多くの者が自らを重ねて追体験し得るだけの真迫性が備わっているとさえ言えるのである。

のみならず、マンガエルにしてもやはり、「読書行為は、読書が行われる時や場所、文字が記されているのが銘板なのか巻物なのか書物のページなのか映像なのかによっても変わってくる」⁵⁸との見解を示している。また、「読書から得られる喜びは、身体自体の快適さに左右されることも少なくない」⁵⁹ことから、「公共図書館で読む書物と、屋根裏部屋や台所で読む書物とはまた味わいが違う」⁶⁰ことにも言及している。さらには、「コンピューターでは、それこそ巻物のように画面を上下に『スクロール』させながらテキストを読んでいく」⁶¹ので、「画面を一目で分かる分量といえ、全体の中のごく限られた部分でしかない」⁶²く、従って、コンピューターでは「そこから、ある種の全体的な印象、つまり読書している間、そのテキストの全てが自らの手中に収まっているという事実から醸成されてくる感覚」⁶³を持つことができないとも述べている。すなわち、少なくとも、「内容は過程を条件づけずにはいられない」⁶⁴との見解に対しては、バーカーツと全く同じ立場を示しているのである。

要するに、バーカーツが指摘する諸現象は、単なる私的な体験の叙述にとどまるものではなく、一般化が可能な一つの縮図として理解すべきもののなのであろう。そういう意味において、「コミュニケーションのメディア〔媒体〕の変容は、意識のより大きな変容を描き出す」⁶⁵との主張を、十分に検討することなしに棄却してしまうことはできない。少なくとも、メディアが変わっても感覚そのものは変わらないとの前提には根拠がないということだけは確かだといえるのではないだろうか。

事実、情報を伝える主要な媒体の変化を、人々の意識や感覚の変化に結び付けて論じているのは上で挙げたような諸学者だけに留まらない。例えば、オングは、「書くこと」の発明により、言葉が専ら声として機能する「声の文化」が、言葉が文字に記されるのを前提とする「文字の文化」へと移り変わり、その結果、人々の思考様式、ひいては社会や文化までもが変化したことについて論じている⁶⁶。また、日本においても、永嶺が、木版本の衰退及び活版本の急激な普及に伴い、人々の読書習慣に質的な変化が見られたことを指摘している⁶⁷。同じく、前田も、従来音読による享受が主流であった読書は、活版印刷本の普及に伴って黙読で享受されるようになっていき、その結果、読書に対する認識や人々の文章感覚までもが変化していったことについて述べている。また、前田は、テレビとラジオを例に挙げ、新しいメディアの登場が、既存のメディアの存在自体を消滅させてしまうことはないにしても、既存のメディアに対する従来の享受形態及び位置づけを変化させ、伝達内容や伝達に用いられる表現様式までも変化させてしまうことに言及している⁶⁸。

あるいは、文章を作成する技法や様式、さらには、それが伝えられる際の物質的な形態が、その文章に何らかの意味を付加する可能性について論じられることもある。例えば、マッケンジーは、コングレーブの戯曲『世の習い』を例に、文章の配置やコンマの有無などテキストに加えられる僅かな変化、あるいは版型など刊行される際の形式が、その作品に対する受容のされ方や格付けを変化させ得ることに論及している⁶⁹。

確かにここで挙げた諸学者は、立場や視点、あるいは論の進め方などもそれぞれ異なり、また、取りあげている時代や場所が同じだというわけでもない。ただし、いずれにも共通しているのは、メディアの変化を、単に意味内容を伝える手段の変化として捉えることを否定している点である。要するに、シャルチエが正しく看破したように、「テキストの意味は、それらが読み手（または聴き手）によって受容・領有されるときに介在する形態に依存」^[70]し、従って、「テキストを提示する形態をかえることで、まったくあたらしい受容のしかたが可能となり、新たな受け手、新たな用法が生み出される」^[71]ということになる。

電子メディアもその例外ではあり得ない。今日における電子メディアの普及は、おそらく、テキストの「まったくあたらしい受容のしかた」を生み出しつつあるのであろう。また、ランカスターが言うように、「電子的メディアにとってよりふさわしい読み書き表現の新しい形態が現れ、現在の形態に最終的に取って代わるということも十分考えられる」^[72]。しかしながら、それは、いったい、いかなるものなのであろうか。

通常、私たちは、言葉で何かを正確に伝えようとするとき、立場を明確にし、筋道立てて考えを述べたり、順を追って事理を説明していく。逆に、そのように表現されて初めて、伝達内容の趣旨が論理的かつ明瞭に理解できたと感じられるのではないだろうか。だからこそ、上田による、「本が現在のような線形の様式で維持されてきたのは、人間の思考と受容の様式にかなっていたから」^[73]だとの見解にも、大抵の者が同意するであろう。ところが、マクルーハンの主張に従えば、「人間の思考と受容の様式にかなっていたから」本が現在のような様式になったというよりは、むしろ、印刷本を中心とする文化が、現在のような「人間の思考と受容の様式」を創りあげていったのだということになる。

マクルーハンは、『ゲーテンベルクの銀河系』と題した書物において、印刷本が人間の精神世界及び社会にもたらした変容について、英文学史や文化人類学等の素材をふんだんに取り入れた議論を展開している。ただし同書は、序章と終章の他、膨大な引用及びその解説から成る非連続的に配置された100以上の節から構成され、論者の視点を固定し順序立てて論旨を展開していくといった通常の論法を基準に眺めた場合、極めて異例な論述形態が採用されている。つまり、そういう意味において、マクルーハンの主張する因果関係が論理的に証明されているとも言い難い。けれども、マクルーハンによれば、そもそもそのような「経験を連続体として線形に把握してゆく習慣」^[74]、あるいは、「印刷物の読者にとってはまったく自然なものである……視点をずえる習慣」^[75]自体が、活字本の普及がもたらした視覚的な経験様式に由来するものだという。そのため、同書では、あえて「さまざまな問題に対するモザイク的な^{アフローチ}接近方法」^[76]が採られているというのである。

一方、歌田によれば、「ゲーテンベルク印刷術の世界を大きく塗り替える『未来の本』のキー概念」^[77]は、「ハイパーテキストというドキュメント・システム」^[78]だということである。ハイパーテキストにおける最大の特徴である「リンク」という技術は、異なるテキストを横断しながら利用すること、還元すれば、テキストをばらばらの断片として利用することを可能にする。つまり、ここで指摘されているように、文章とはリニアなものであり、テキストとは因果関係をもって並んでいる——^{シーケンシャルな}順序だった——ものだという従来の固定概念は、ハイパーテキストの登

場及び普及により、自明なものではなくなりつつあるということになる。

ということは、歌田が述べるように、ゲーテンベルク文明から、『『ハイパーテキスト』がつくるポスト・ゲーテンベルク文明』⁷⁹⁾への移行とは、「本という形にまとめられたテキストこそが価値があると信じてきた時代から、粗野でしばしば御しがたいばらばらなテキストで構成される世界への移行」⁸⁰⁾として捉えることが可能であるのかもしれない。

いずれにせよ、読書や情報伝達の際のメディア形態が変わることは、単に読書に利用される手段、ないしは情報が伝えられる際の物質的な枠組みが変化するというに留まるものではない。それは、情報やテキストの取り扱いにおいて何が本質的であり、何が重要なのかという感覚や判断基準自体を変え、従来の時間や空間の概念、ひいては、世界像や思考様式までも半ば意識されないうちに変えてしまうものなのである。

IV. 終 章

図書館では、自らの利用価値を高めたりサービスを向上させるための手段を、以前から積極的に取り入れてきた。時代的要請や技術的変革に合わせ、従来の役割を拡大ないしは修正させてもきた。けれども、今日の情報技術がもたらそうとしている変化は、図書館がこれまでに経験してきた変化と同質ではない。というのは、これまでに導入された諸手段は、図書館を図書館として、その機能や役割のみを変化させるものであったのに対し、今般導入されつつある〈手段〉の方は、図書館そのものの在り方にまで影響を及ぼすものだからである。だからこそ、変化に対して寛容であった図書館が、コンピュータ革命に対しては慎重な態度を取ったのだと言えるであろう。すなわち、田畑が観察している通り、「20数年前、図書館の分野にコンピュータ革命が押し寄せた頃、当時の図書館員は必ずしもそれを歓迎しなかった」⁸¹⁾がために、「図書館員がそれを受け入れるまでには相当の抵抗があった」⁸²⁾のである。また、「コンピュータ革命」を受入れつつある現在でさえ、それは、図書館を向上させる単なる手段として無抵抗に歓迎されているとは言い難い。

たしかに、図書館の電子化を進め、情報提供に関する機能を拡大ないしは充実させていくことは、情報化社会における図書館や図書館員の存在意義を高める方向への歩みだと理解することもできる。だが、この方向の延長線上に、いわゆる電子図書館なるものが待ち受けているのだとすれば、従来の図書館における基本的な諸要素自体が、一時的な繁栄と引き換えに、自らの存在意義を捨てていくことになる可能性をもつ。つまり、施設としての図書館、物体としての資料、及び両者を取り持つ専門的職員などは、少なくともこれまでと同じような形で存続できなくなってしまうおそれがあるのである。同様に、最近では、書物を取り巻く世界でも、その種のおそれを捉えた記述が数多く提出されている。例えば、津野は次のように述べている。

このところ、本についての本がさかんに出版されるようになった。そのおおくが木版や初期の活版印刷による大衆的な廉価本にかんする研究書である。……こうした本の始源状態にたいする関心の背後には一種のおそれの気分があるように思う。大雑把にいつてしまえば、近い将来、これまで私たちが親しんできた本のかたちやしくみが変わり、それによっ

て私たちの本とのつきあい方も大きく変化せざるをえないのではないだろうか、というおそれである⁸³。

図書館界での「おそれ」についても、上の言葉に準じて述べることができよう。つまり、「これまで私たちが親しんできた図書館のかたちやしくみが変わり、それによって私たちの図書館とのつきあい方も大きく変化せざるをえないのではないだろうか、というおそれ」である。もちろん、情報技術の発達による影響を被っているのは、図書館だけではない。今や、社会全体がコンピュータ化に伴う何らかの変化を余儀なくされているといっても過言ではないであろう。それでも、図書館を始め、伝統的な意味での書物を中心に成立してきた領域では、新しいメディアの台頭が、書かれたものに対する従来のあり方や価値観など、これまで築き上げてきた何か大切なものを根底から揺り動かしかねないものとして捉えられる傾向にある。また、図書館の場合、「図書館のかたちやしくみ」、あるいは、「図書館とのつきあい方」が変わることは、図書館の社会的な価値や、場合によっては存亡に関わるため、その「おそれ」は、より深刻であるとも言えるかもしれない。だからこそ、図書館の世界では、新しい技術及び伝達媒体の登場に無関心ではいられないのである。

なるほど、図書館界での議論は、書物を取り巻く世界全般に関することではなく、どちらかといえば、図書館という特定の場における問題に集中している。また、多くの場合、新しい情報技術が、読書行為や人々の情報に対する感覚をどのように変えていくのかということではなく、その技術を利用して図書館をいかに変えていくべきか、あるいは変えてはならないかということの方が問題とされている。すなわち、表面的に見た場合、図書館界において、新しいテクノロジーは、行為主体の意図に従属する道具的存在として認識されているかのようでもある。けれども、具体的な事実経過を眺めた場合、今日のデジタル情報技術は、図書館の世界に対し、単なる道具的な利便さ以上の影響をもたらしている。だからこそ、図書館界では、それらをあくまでも〈図書館本来の〉理念や役割に役立てる道具として用いるべきことが強調されるのである。

要するに、図書館は、他の領域以上に今日のデジタル情報革命、及びそれに伴うメディアの変化に直面しているのだと言える。図書館界では、図書館という具体的な問題を論じることを通じ、他の領域の代表となって、今日のデジタル情報革命に対して、なんとか折り合いをつけようとしているのである。すなわち、図書館界における「おそれ」は、図書館や図書館員など自分たちの役割や位置付けに関する不安なのであるが、それと同時に、あるいは、それ以上に、自分達の信じる価値に関する「おそれ」である。それは、図書館の将来に関する不安よりも、従来自分達が信じてきた知識や情報の体系そのものの揺らぎに対する不安なのである。すなわち、新しいメディアが自分達の抱いてきた価値やリアリティーを覆そうとすることに対する一抹の不安について論じているという意味において、図書界における議論と、書物を取り巻く他の領域のそれとは、その本質を共有しているといえるであろう。

註

1. 「本とコンピュータ」編集室編『人はなぜ、本を読まなくなったのか?』大日本印刷、2000、p. 10.
2. 高山正也「大学図書館職員に求められる専門性と図書館の経営環境」大学図書館問題研究会編『電子図書館時代の図書館員 Part 2: 経営のヒントと専門性』大学図書館問題研究会、2000、p. 1.
3. 「特集: テクノロジーと図書館」『図書館界』51(5): 2000. 1, p. 258-366.
4. 馬場俊明「編集にあたって (特集: テクノロジーと図書館)」『図書館界』51(5): 2000. 1, p. 258.
5. 西村一夫「コンピュータテクノロジーがもたらす資料提供サービス」『図書館界』51(5): 2000. 1, p. 298.
6. 日本図書館協会図書館調査委員会編『日本の図書館: 統計と名簿 1999』日本図書館協会、1999、p. 212, 324.; 図書館問題研究会『公共図書館におけるコンピュータ導入の現状と問題点』日外アソシエーツ、1989.
7. ゴットフリート・ロスト『司書: 宝番か餌番か』(石丸昭二訳、白水社、1994) p. 181.
8. 山本昭和「テクノロジーの進歩と図書館の発展」『図書館界』51(5): 2000. 1, p. 260.
9. 千賀正之『本と図書館を読む: 印刷本が消えて電子図書館が繁栄するという嘘?』マルチメディア研究所、1998、p. 84.
10. 横山桂「テクノロジーと図書館: 大学図書館を中心に」『図書館界』51(5): 2000. 1, p. 279.
11. *ibid.*
12. 長谷川秀記「電子図書館と出版社」原田勝・田屋裕之編『電子図書館』勁草書房、1999、p. 69.
13. 日本図書館協会編『市民の図書館』日本図書館協会、1970、p. 48.
14. フレデリック W. ランカスター「ペーパーレス社会の発展と図書館のかかわり」(嶋田光代訳)『現代の図書館』21(3): 1983. 9, p. 176.
15. M. K. バックランド『図書館サービスの再構築: 電子メディア時代へ向けての提言』(高山正也・桂啓壮訳、勁草書房、1994) p. 2.
16. *ibid.*, p. i.
17. *ibid.*
18. *ibid.*, p. 9.
19. 長尾真『電子図書館』岩波書店、1994、p. 17.
20. 戸田光昭「テクノロジーの変化と専門図書館の役割」『図書館界』51(5): 2000. 1, p. 286.
21. ウィリアム F. バーゾール『電子図書館の神話』(根本彰・山本順一・二村健・平井歩実訳、勁草書房、1996) p. vii-viii.
22. 『第48回日本図書館情報学会研究大会・臨時総会 ご案内』日本図書館情報学会、2000、p. 5.
23. Michael H. Harris & Stan A. Hannah, *Into the future: the foundations of library and information services in the post-industrial era* (Norwood, N. J., Ablex, 1993) p. 33-58.
24. F. W. ランカスター『紙からエレクトロニクスへ: 図書館・本の行方』(田屋裕之訳、日外アソシエーツ、1987) p. 216.
25. *ibid.*, p. 16.
26. ウィリアム F. バーゾール、*op. cit.*, p. ix.
27. *ibid.*, p. 50.
28. *ibid.*, p. 190.
29. *ibid.*, p. 135.
30. *ibid.*, p. 98.
31. *ibid.*, p. 205.
32. *ibid.*, p. 136.
33. *ibid.*, p. 139.
34. *ibid.*, p. 138.
35. *ibid.*, p. 137.

36. *ibid.*, p. 171.
37. 合庭惇「電子出版とデジタルライブラリー」『現代の図書館』36(1): 1998. 3, p. 10.
38. *ibid.*
39. *ibid.*, p. 9.
40. *ibid.*, p. 11.
41. *ibid.*
42. *ibid.*
43. *ibid.*, p. 10.
44. M. マクルーハン『メディア論：人間の拡張の諸相』（栗原裕・河本仲聖共訳、みすず書房、1987）p. 18.
45. *ibid.*, p. 22.
46. M. マクルーハン『ゲーテンベルクの銀河系：活字人間の形成』（森常治訳、みすず書房、1986）p. 7.
47. *ibid.*, p. 66.
48. *ibid.*, p. 51.
49. M. マクルーハン『メディア論』、*op. cit.*
50. スヴェン・バーカーツ『ゲーテンベルクへの挽歌：エレクトロニクス時代における読書の運命』（船木裕訳、青土社、1995）p. 25.
51. *ibid.*, p. 11.
52. *ibid.*, p. 14.
53. *ibid.*, p. 15.
54. *ibid.*, p. 15.
55. *ibid.*, p. 16.
56. *ibid.*, p. 12.
57. アルベルト・マンゲル『読書の歴史：あるいは読者の歴史』（原田範行訳、柏書房、1999）p. 155.
58. *ibid.*, p. 48.
59. *ibid.*, p. 174.
60. *ibid.*
61. *ibid.*, p. 146.
62. *ibid.*
63. *ibid.*
64. スヴェン・バーカーツ、*op. cit.*, p. 207.
65. *ibid.*, p. 247.
66. W. J. オング『声の文化と文字の文化』（桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳、藤原書店、1991）
67. 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部、1997.
68. 前田愛『近代読者の成立』有精堂、1973、p. 132-167.
69. D. F. McKenzie, *Bibliography and the sociology of texts* (London, The British Library, 1986) p. 1-21.
70. ロジェ・シャルチエ『書物の秩序』（長谷川輝夫訳、筑摩書房、1996）p. 022.
71. ロジェ・シャルチエ（二宮宏之訳）「表象としての世界」『思想』812: 1992. 2, p. 19.
72. F. W. ランカスター、*op. cit.*, p. 200.
73. 上田修一「紙の印刷物は電子媒体より強い：紙の現在と電子図書館への疑問」『現代の図書館』36(1): 1998. 3, p. 8.
74. M. マクルーハン『ゲーテンベルクの銀河系』、*op. cit.*, p. 193.
75. *ibid.*, p. 194.
76. *ibid.*, p. i.
77. 歌田明弘『本の未来はどうか』中公新書、2000、224.

薬師院：情報革命がもたらす図書館の変容

- 78. *ibid.*
- 79. *ibid.*, p. 67.
- 80. *ibid.*
- 81. 田畑孝一『デジタル図書館』勉誠出版、1999、p. 22.
- 82. *ibid.*
- 83. 津野海太郎『本とコンピューター』晶文社、1993、p. 261.